

地水火風

牧野 恒一

阪神・淡路大震災から今年でもう20年になるが、ついでこの間のような気もする。

昨年は東京オリピックから50年ということでテレビでも何度か特集が組まれた。その中で、最も印象に残ったのは、東京オリピックの開会式のちよと20年前に、同じ国立競技場で学徒出陣の壮行会が行われた、という番組だった。当時高校生だった私は、東京オリピックの開会式を感じながらテレビで見ていたのだが、親たちはわずかに20年前に学徒出陣の壮行会がここで行われ、その後、全く何もない廃墟の中から立ち上がった、わずか20年でオリピックを開催したという感慨を抱いて同じ開会式を見ていたのだ、と改めて思い至った。

敗戦直後に生まれた私たちの世代にはもうないが、親たちの世代にとっては生々しかったはずだ。生々しい記憶が残っているうちに、次の世代に伝えていくことが、古い世代の役割だと改めて思う。

1月17日には、神戸などで哀悼と反省と決意のための大規模な催しが行われる。この機会に、最近考えていることを述べておきたい。

「木造モルタルと8分消防」

阪神・淡路大震災では、大規模な延焼火災が多数発生し、焼損面積3万3000㎡以上の市街地大火だけでも6件を数えている(消防白書)。

市街地大火は戦争直後から昭和30年代の初め頃まで頻りに起こっていたが、戦後の混乱期が終息

し、都市構造と消防体制が整備されるに従って急速に減少し、昭和40年代の初め頃にはほとんど姿を消した。市街地大火減少の主役は、木造建築の外壁と軒裏をモルタルで被覆し、開口部に網入りガラスを入れる「防火構造(木造モルタル造)」の

市計画や建築など専門家の願望だった。だが、この頃は、まだ戦争の傷跡は癒えず、日本経済は困窮を極めており、この時期に、欧米のような燃化都市は無理。次善の策を」という現実論が大勢を占めたのは、やむを得なかったと言える。

の恐れのある部分」をモルタルで被覆し開口部を網入りガラスにしておくことは、延焼を遅くすることができ、その間に消防車が駆けつけて消火してしまえば隣家への延焼を阻止でき、ひいては市街地大火を防ぐことができる。

及し消防力が整備されるに従って、市街地大火は急速に減っていったから(主要道路の沿道の建築物だけでも耐火建築物にして延焼防止を図ろうとした耐火建築促進法(昭和25年)が所期の成果を上げられなかったことは、現在の日本の街並みを見れば推測できる。

これらにより火災が隣接建物に延焼するケースが出てくると、やがて次第に火勢が強くなり、木造モルタル造程度の防火性能では更なる延焼を食い止めることができなくなり、消防力は相対的にますます劣勢になって市街地大火に至る。

阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。

阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。

阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。阪神・淡路大震災でこのように改められた。

阪神・淡路大震災から20年

木造モルタル造はもうやめよう

普及と、6分から8分まで駆けて消火にあたる消防力の整備だった。

市街地大火防止の王道は、都市建築物の不燃化だ。大火防止のためにも

内部に入らなれば燃え広がらない。パリやロンドンのような不燃化された立派な街並みをつくりたい、というのが戦後の復興に当たった都

この戦略は不成功だった。木造モルタル造が普

も、火災が小さいうちに住民の力で消火して、市街地大火にならないようしよう、というのが現在の地震火災対策の中心になっている。だが、こ

これは基本のところ間違っているのではない。993年、死者2300人)や奥尻島津波災害(1

でも大規模な津波火災が発生している。一方、2004年スマトラ島沖地震津波(死者22万人以上)では、インド洋周辺各地で大規模な津波被害が発生したが、津波火災の話は聞かない。昨年9月に

最大の津波被害を出したバンタアチエに調査に行ったが、単発の火災は起こったものの、市街地大火は発生していない。

「都市の不燃化を正面から考えよう」

大地震や大津波でも市街地大火にならないようするには、地域防災力の強化も大事だが、それ以上に、都市構造の不燃化が重要なのだと思う。

首都直下地震や南海トラフ沖地震の発生が懸念される中、日本が貧しい時代に考えられた「木造モルタル造」はもうやめよう。阪神・淡路大震災20年を機会に、改めてそ

う。建物から建物に延焼する場合は、火災建物の開口部から吹き出す火炎が隣接建物の外壁上部や軒裏に当たり、そこから火が内部に入らなれば燃え広がらない。パリやロンドンのような不燃化された立派な街並みをつくりたい、というのが戦後の復興に当たった都

この戦略は不成功だった。木造モルタル造が普

も、火災が小さいうちに住民の力で消火して、市街地大火にならないようしよう、というのが現在の地震火災対策の中心になっている。だが、こ

これは基本のところ間違っているのではない。993年、死者2300人)や奥尻島津波災害(1

でも大規模な津波火災が発生している。一方、2004年スマトラ島沖地震津波(死者22万人以上)では、インド洋周辺各地で大規模な津波被害が発生したが、津波火災の話は聞かない。昨年9月に

最大の津波被害を出したバンタアチエに調査に行ったが、単発の火災は起こったものの、市街地大火は発生していない。